

## きもの・その美

服部和子きもの学院 院長 服部和子  
平安女学院大学客員教授

きものは文様や彩りの華麗さにおいて、世界の民族衣装の中でも秀でたものと言われ、日本人の心であります。

現在のきものの源流は小袖で、平安時代の十二単の肌に近い一番下に着ていたものです。公家政治から武家政治に移行して、室町時代になって上着として定着しました。

きものの変遷において、大和時代には男性は衣禪きぬばま、女性は衣裳きぬもと呼ばれる「はにわ」のような上下二部式衣服を着ていました。朝鮮からの大きな影響を感じます。

奈良時代に入り、中国から仏教の伝来とともにきものにも色による階級制度が生まれました。「纈纈こうけち」、「臈纈ろうけち」、「夾纈きょうけち」の染色技法も発達していきました。

平安時代に入り、遣唐使が廃止され、日本人の知恵で十二単が誕生します。

鎌倉時代、室町時代に入り、小袖の誕生を見ます。現代の礼装に用いられている家紋の紋所もこの時代に出来上がりました。

桃山時代に小袖はよりきらびやかさを増していきます。

江戸時代に入り、歌舞伎の発達により、長い袖の振袖が発生します。

絵師だった宮崎友禅齋の揚子糊の考案により、手描友禅が出てきました。手描友禅により、きものに花鳥風月の写実的な模様を染め上げることが出来るようになり、きものは豪華さをましていきました。

日本のきものには、次のような独自の特徴があります。きものには四季折々に合わせて季節を楽しむ「衣替え」があります。夏は透け感のある織りの組織、絹や紗など布そのものと、季節感のある絵柄で見る人を楽しませます。

きものには格式を重んじたミセスの第一礼装の黒留袖にも家紋が入っています。

きものには年齢によって肩あげ、腰あげなどの可愛さを出すと同時に、子供の成長に合わせて肩あげや腰あげの寸法を調整する知恵があります。

きものは平面的にたたため、着る人の着こなしによって可憐になり、また粋な着こなしにもなります。

「きもの通」と言われる人は、きものを着るのではなく、「着こなす」と言われます。

きものを着る人も見る人も、夏は涼やかに、冬は雅に、きものと帯のコーディネートを味わいたいものです。